

国際シンポジウム「多数のハザードをまとめて考える」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、10月24日(金)、環境総合館において、国際シンポジウム「多数のハザードをまとめて考える」を開催しました。これは、主催者である篠田雅人環境学研究科教授が研究代表者となっている通称「4Dプロジェクト(科研費基盤研究(S)「乾燥地災害学の体系化」)」の成果発表会でもあり、発表は、口頭が5件、ポスターが



ポスター発表の様子

29件で、筆頭発表者は、日本人21名、モンゴル人6名、中国人5名、アメリカ人1名と多様な背景の研究者が参加しました。

災害多発国である日本では、「火山噴火により噴出した岩石や火山灰が堆積し、直後に襲来した台風の大雨により土石流や泥流が発生し、下流の地域を襲う」という複数のハザード(災害につながる原因)による災害発生シナリオは十分に考えられます。本シンポジウムは、このような発想のもと、ハザードの種類は異なりますが、乾燥地にあるモンゴルの多様なハザードについて、災害研究者と地域研究者が集まり、考える機会としました。

シンポジウムで特に注目した点は、モンゴルで2009年、2010年の冬に発生したゾド(モンゴル語で寒雪害の意)と他のハザード(干ばつ・砂塵嵐・砂漠化)との関連であり、これらのハザードをまとめて考えることの有効性を検討しました。このゾドではモンゴル国内の家畜の4分の1が死に、国内経済や公衆衛生に深刻な影響をおよぼしました。最後に行われたパネル・ディスカッションでは、シンポジウムの議論を今後どのように現場の災害管理に役立てていくかという点について考えを深めました。

減災館第1回特別企画展を開催

●減災連携研究センター

減災館では、9月2日(火)から10月18日(土)までの間、第1回特別企画展「伊勢湾台風ー日本の防災の幕開けー」を開催しました。1959年に発生した伊勢湾台風は、第二次世界大戦後の高度経済成長期にある日本を直撃した災害でした。被害は、愛知県、岐阜県、三重県におよび、高潮に伴う破堤により、被災地は2カ月近く冠水し、大きな被害



自分の街の被害の様子をみつめる来館者

を受けました。伊勢湾台風の経験は、「防災」の重要性を意識させ、その復興過程においては、「災害対策基本法」をはじめ、減災の日本の災害対策の礎となる制度が構築されました。また、土木工学研究を推進するため、1961年4月1日に本学工学部に土木工学科が新設されました。

展示では、当時の最先端の技術を活用して撮影された空撮写真、一刻も早い復旧に向けて尽力した行政や、中部電力、東邦ガスなどのライフライン企業の取り組みなど、伊勢湾台風がきっかけとなり新たに構築された日本の防災の取り組みを紹介しました。また、開催に際して、中部地区自然災害科学資料センター所蔵資料、東海市の市民の方による浸水被害を伝える資料、伊勢湾台風の復興住宅など、様々な方から資料提供を受けました。展示と併せて「げんさいカフェ」や展示を使ったミニ防災レクチャー「ギャラリートーク」を開催しました。来館者からは「忘れていた当時の情景を思いだした。経験を伝えなければならぬと感じた」などの感想が寄せられました。

2014年秋季特別展を開催

●附属図書館



展示を見学する来場者

附属図書館及び同研究開発室は、10月18日(土)から11月6日(木)までの間、2014年秋季特別展「時を超える贈り物ー所蔵資料が語る学びの世界ー」を開催しました。一般市民や本学の卒業生等約450名の来場がありました。

今回の展示会では、本学が所蔵する資料のうち、「学び」をテーマに、寺子屋で手習いや読み書きに使われた資料や、明治、大正時代に学校で教材として使われた掛け図や教科書、秘伝書や指南書、外国からの知識の受容など、先人達の「学び」に対する姿勢を示す資料を4つのパートに分けて紹介しました。また、体験コーナーとして、展示にも用いた、江戸時代の連鶴の折り方を紹介した資料『秘伝千羽鶴折形』の中から2種類を選び、実際に2羽、3羽とつながった鶴を折ることができるコーナーを設けました。

来場者からは、「大学にこのような資料があるとは知らなかった」、「昔の学びの様子がよくわかった」、「折り鶴が楽しかった」などの声が寄せられ、好評のうちに終了しました。

第3回地球教室を開催

●博物館



築周辺において石灰岩に含まれる化石を観察する参加者の様子

博物館は、10月25日(土)、26日(日)の両日、今年度3回目となるフィールドセミナー地球教室「ナゴヤで化石をさがそう！」を開催しました。今回は、小中学生や一般の方、計24名が参加し、名古屋市内の建築物の石材に含まれる化石の見学を行いました。1日目は、同館において岩石や化石の種類に関する講義を行った後、建材としてカットされた岩石の表面に化石がどのように表れるかを知るために、現生の貝を切断してできた断面を観察しました。この予習を踏まえ、2日目は名古屋駅と栄周辺に出かけ、壁や柱に用いられている石材からさまざまな化石の発見・観察を行いました。この地域は改築が多いため、毎年、「化石スポット」の情報更新をしています。通勤など普段の生活でみられた場所にも、意外な自然が隠されていたことに参加者は驚きながら、大変興味深く化石を観察していました。なお、この事業は名古屋市科学館との協定事業で、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けています。

第104回防災アカデミー開催

●減災連携研究センター



講演する柳川氏

減災連携研究センターは、10月23日(木)、減災館において第104回防災アカデミーを開催しました。今回は元NHK解説委員の柳川喜郎氏により「100年前の桜島噴火災害に学ぶ」というタイトルで講演が行われ、90名が参加しました。講演では、大規模地震対策特別措置法の制定を契機として災害情報の伝達と利用について考える中で、1914年の大正桜島噴火の事例にたどりついたことや、曖昧な災害情報の扱いを誤ったために悲劇がもたらされ、「科学不信の碑」とも言われる桜島爆発記念碑が建立された経緯などについて、30年以上前に行われた取材を振り返る形で生き生きと語られました。こうした災害情報の扱いの難しさは最近発生した御嶽山の噴火にもつながるものであり、災害教訓を受け継ぎ生かすことの重要性と難しさが改めて浮き彫りになりました。講演は、多数の火山を抱える日本として監視体制の整備の重要性を訴えて締めくくられました。